

タツノオトシゴさんが創った世界の登場人物になって、みんなで夢の話をしませんか？

## 新リレー企画<不思議な夢>・プロローグ

タツノオトシゴ



みなさん、こんにちは！  
あたらしい企画シリーズへようこそ（^）

19世紀の末、とある小さな湖のほとりで、研究室の学生と教授が合宿しています。世の中は世紀末を迎え、不安や混乱の世界です。しかし、アカデミックな研究を続ける彼らは、都会の喧騒から離れたこの場所で13日間の合宿をする事になりました。研究のテーマは各人の体験から「不思議な夢」の記録をもとに、毎日一人ずつ発表し、最終日にまとめを行うという趣旨です。

合宿に使っている建物は、T教授の知り合いで、昔から此処に住んでいるS未亡人の所有している施設で、食事などはメイドさんがお世話をしてくれています。湖の周りには散策路があり、周囲10キロくらいのコースは歩いて2時間半のコースです。途中に、古びた中世の教会があり、日曜日には周辺の住人が50人近く集まります。



あまり尋ねてくる人もないので、夕食にはS未亡人も参加して「不思議な夢」の内容を聞かせてもらうという約束で今回の利用を快諾してくれています。

研究室の合宿といっても、皆が集まって話をするのは夕食の時間と次の日の午前中だけで、他の時間は各々自由に行動しています。自室に戻り本を読んだり、仲間と遊びに出かけたりしています。T教授も2階の書斎を使わしてもらい、学生の宿舎は同じフロアの個室を借りることにしました。

S未亡人の家は、1階に離れがあり、婦人とメイドさんの二人が住んでいます。その他に、庭や建物の手入れなどに通ってくる使用人がいますが、週に3~4日、午後から気が向いたら、ぶらっと覗きにくるのが日課となっています。40代のようなのですが、近くの掘っ立て小屋に3年前からひとりで住んでいます。

では、トップバッター、「Cacco」さん、ご指名ですよ（^）;

## 1番目の語り手

1887年秋、僕は13才。

通っていたギムナジウムで友達とじゃれていて怪我をしてしまい、ついでにずるずる学校に戻らずに自宅で療養中だ。

こんな身分はとっても心地よい。毎日がピクニックのように近くの湖を散策しながら、好きなだけ思いを巡らすことができる。怪我なんてさ、形だけみたいなもんでさ、実はとっくになおってるんだ。こんな不埒な息子で父さんと母さんにはちょっと気の毒みたいな気がするけどね。

そんな僕の優雅な生活にちょっと面白い情報が飛び込んできた。ご近所のS未亡人のお屋敷(いや～ここがまさしくお屋敷って感じでさ、ここらへの住人が100人くらい一気に遊びにきたってだいじょぶだと思うよ)にどっかの研究室の・・・確か、タツノオトシゴとかいう変わった名前の教授と学生たちが泊り込んで「不思議な夢」について体験を語るんだってさ。S未亡人もただの金持ちの変わり者だと思ってたら、案外、知的な金持ちの変わり者だったんだね。

その集まりに僕はまだ子供だけどスペシャルゲストとして参加させてもらおうと思ってるんだ。ご近所のお楽しみでね。

「夢ってどこからくるんだろう？」っていつも思ってた。誰にも言っていないんだけどまだ僕がもっともっと小さい時に忘れられないちょー怖い夢を見たんだ。こんなに忘れられないって事は「この夢はおまえにとってとっても重要なんだ」ってどっかで誰かが言ってるような気がするんだ。だからもちろんタツノオトシゴ教授に話す気はない。S未亡人もいるところで重大な秘密は話せないしね。女っておしゃべりだろ？

だいたい僕は毎日毎日溢れるように夢を見てるんだ。ときに夜見ている夢なのか昼見ている夢なのか区別がつかなくなるほどさ。

だからね、今日は昨日見た夢を話すつもりなんだけどね。

## ～ピンク～奇妙な夢～

紫色の渡り廊下で 顔のない男と出会う

僕のほうを見て笑ってるから 別に恐くないが歩けない

壁の絵画に2、3日前の僕の記憶が描かれていて 横にいるのがたぶん君だな

二階の老婆は患ってて 汚れた手を僕に差し出す

君はバッグを開けて ピンクのガラス玉を渡して微笑む

それはなんだろう？きっと何かを表している隠喩(メタファー)なんだろう？

僕にもおくれよ君のピンクで染めて

まあ詩的に書けばこんな夢なんだけど、この夢には続きがあって、突然夢の中で目覚めた僕はベッドサイドで誰か男が歌を歌ってるのに気が付く。その歌は異国の言葉で歌われていて意味はまったくわからないはずなのに、さっきの夢の内容を歌ってるってことを感じるんだ。そして夢の中で僕は思うんだ。「ああ、この男は僕だ。僕はきっとこの先転生を繰り返していつかこの男になって異国に生まれ変わるんだ」ってね。そこで僕は再び目が覚めたんだ。

どうかな？なかなか素敵な夢じゃない？タツノオトシゴ教授がどんなふうに分けてくれるか楽しみだ。他の学生とか、もちろんS夫人の反応も。変わり者の夫人に僕の方が変わり者だって思われちゃうかな。ま、それならそれでいいさ。

さて、もうS夫人の屋敷は目の前だ。

呼び鈴を鳴らせば執事が扉を開けて微笑みながら僕を招きいれてくれるだろう。

「よくきてくれましたね。今日のスペシャル・ゲスト、カール・グスタフ・ユング」

僕は期待に上気して頬を紅らめながら少年らしく元気に答える。

「はい、よろしくお願ひします！」

これから十三夜、どんな奇妙な夢物語が展開するのか、僕は期待に胸躍らせる。



では、二番目の語り手は「TICA」さん、よろしく！！